

<b>Title</b>	高橋義文氏報告「ラインホールド・ニーバーと社会福音運動」(ラインホールド・ニーバー研究)
<b>Author(s)</b>	鈴木, 幸
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.2, 2013.1 : 24-25
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4340">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4340</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## ラインホールド・ニーバー研究 高橋義文氏報告 「ラインホールド・ニーバーと社会福音運動」

2012年6月11日(月)聖学院本部新館2階会議室において、2012年度第1回目「ラインホールド・ニーバー」研究会が開催された。今回の研究会は日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究(B)「ラインホールド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」(課題番号:23320025、研究代表:高橋義文)の助成で開催され、総合研究所のラインホールド・ニーバー研究会との共催で行われた。聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科長、教授の高橋義文氏より「ラインホールド・ニーバーと社会福音運動」と題して、ご発表いただいた。参加者は22名であった。概要は以下の通りである。

ニーバーは、青年期の一時期に「社会福音運動」(Social Gospel Movement)に参画したに過ぎないと言われるが、一方では社会福音運動の預言者と呼ばれるラウシェンブッシュの「正当な継承者」であるとも言われる。そこで、ニーバーと社会福音運動との関わりと、その経緯と内容、そして1930年代以降に発展される社会福音運動の思想への批判の理由や論拠を、歴史に沿って明らかにすることが本研究会における目的とされた。

ニーバーが社会福音運動に加わるのは、この運動が衰退過程にあった1920年代であるが、幼年期から教育を受けた教派とその学校を支配していたエートスのひとつが社会福祉活動であり、その代



高橋義文教授

表者が父であるグスタフ・ニーバーであった。子は父の影響を強く受けて育った。すなわち、ニーバーは幼少の頃から「社会福音運動の影響下にあった」のであり、「社会福音の視点」を持ち合わせていた。しかし、イェール時代にニーバーが集中したのは哲学の分野であったため、その時期は社会福音に関心がないように見られたが、「認識論への倦怠」を覚えはじめたことから、社会への関わりを求めるようになる。また第一次世界大戦中も戦争に関わる事柄に忙殺されたが、ラウシェンブッシュの弟子筋であり、アメリカ社会の「自己満足に挑戦した預言者」であるとニーバーが受け止めたC・D・ウィリアムズとの出会いによって、社会的なキリスト教に急速に魅せられるようになる。そしてウィリアムズとの出会いが果たした役割とは、ニーバーをS・エディとK・ページといった社会福音運動の活動家に引き合わせたことであった。ニーバーは彼らを通して自らの社会意識を高め、社会的視点を豊かなものにしていった。それは、「キリスト教社会秩序協会」による活動や、ヨーロッパ研修旅行「アメリカン・セミナー」への参加、月刊誌『ワールド・トゥモロウ』の発行・編集といった形で表されている。しかし、その中でニーバーは社会福音運動の立場を根底からとらえ直す独自の思考を続け、その思想に対する疑惑



の念が『道徳人間と非道徳的社会』（1932年）に結実される。

ニーバーの社会福音運動への参画は、ラウシェンブッシュの影響を強烈に受けたからとは考えにくい。それは両者の時代にはずれがあり、ニーバーが包括的にラウシェンブッシュを論じた「歴史的視点から見たウォルター・ラウシェンブッシュ」ではすでに時代遅れとなったその事実を指摘している。それは、ラウシェンブッシュの観察眼を評価しつつ、当時の真の問題が中産階級プロテスタントの存在にあったことを見逃したこと、その対処法の問題、ヘブライ預言者理解に関する問題、新約聖書における愛の概念の理解の不十分さ、「正義の構造を理解しなかった」こと、「神の国」概念の楽観性の問題から見る事ができる。ニーバーにとって、イエスは受難のメシアであり、贖罪論が不足しているラウシェンブッシュとでは、思想的に質的な相違が見られた。さらに、ニーバーはマルクス主義との取り組みを経たことで、ラウシェンブッシュ的社会福音とは決定的に質的に異なる神学へと導かれていったことから、両者の間には「断絶」が見られることが論じられた。

なお、質疑応答で挙げられた主な質問は以下の通りである。

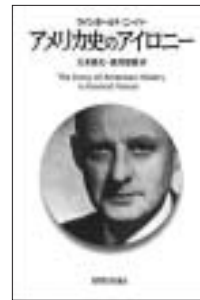
- ・ニーバーがラウシェンブッシュの影響を受けたのはいつか。
- ・父グスタフの影響はどれほどであったか。
- ・時代背景にある激動に反映された思想とは。
- ・ニーバーと同時期の人には、ニーバーはどのように捉えられていたか。

ニーバーの歴史的な確認をすることでその事実をとらえ直す試みを中心に活発な議論がなされた。

（すずき・みゆき 聖学院大学総合研究所特任研究員）

## 聖学院大学出版会の本

### ラインホルド・ニーバー 関連書籍



### アメリカ史のアイロニー

本書の原書は1952年に出版。世界史的「大国」アメリカの問題を「権力の腐敗」の問題として鋭く抉り出し、アメリカを自己認識と責任意識へと導こうとする、現代の問題をも照射するアメリカ論の新訳。

付録として巻末にニーバーの「ユーモアと信仰」も所収されている。

ラインホルド・ニーバー 著  
大木 英夫、深井 智朗 訳  
定価：2,800円＋税  
ISBN978-4-915832-97-0 C3036

全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。  
amazon.co.jp でもご購入いただけます。

お問い合わせ先

聖学院大学出版会 TEL 048-725-9801

書籍の詳細は大学出版部協会ホームページに掲載されています。

ご覧いただければ幸いです。

アドレス <http://www.ajup-net.com/>